

アジア・太平洋研究センター主催講演会

日 時：2019年3月29日（金）

場 所：Q棟5階 51, 52会議室

テーマ：中国における改革開放の現状と展望

報告者：趙 虎吉（中国共産党中央党校元教授）



1949年10月1日に建国が宣言された中華人民共和国の歴史は、中国共産党第11期3中全会が開かれた1978年12月を境に、毛沢東時代と改革開放時代に大きく二分することができる。改革開放時代は昨年12月にちょうど40周年を迎え、本年10月には中華人民共和国建国70周年を迎える。これを踏まえてこの講演会では、中国共産党中央党校元教授・趙虎吉先生をお招きし、「中国における改革開放の現状と展望」をテーマにご講演をいただいた。その要旨は次の通りである。

改革開放時代の現状と展望について述べるには、毛沢東の政治理念と改革開放時代の基礎を築いた鄧小平の政治理念を比較する必要がある。

毛沢東の政治理念については、彼のどこに誤りがあり、それが今日の問題とどのようにつながっているか理解しなければならない。1949年に中華人民共和国を建国する以前の毛沢東は、ソ連留学を経験した他の幹部と異なって、理想主義的というより実用主義的であった。例えば毛沢東はソ連留学組が主導した都市暴動による革命を否定的に捉えて、中国の現実に立脚した農村革命を推進した。毛沢東の目算が狂ったのは、中国国民党との戦いにおいてわずか5年たらずで勝利を獲得し、中華人民共和国を建国したことだった。これ以降毛沢東の政治理念は実用主義から理想主義へ傾いていく。毛沢東は人間の強い意志があれば何でも実現することができるといったよう

に、人間の意志を過信するようになった。毛沢東が1940年代から1950年代に書き残した詩のなかにも理想主義的な側面を確認することができ、宇宙全体があたかも自分の家であるかのような表現が多くみられた。イギリスに追いつき追い越すことを目標としたが、そのプロセスで多くの餓死者をだすなど政策の失敗をもたらした。ただし、そのような政策の失敗にもかかわらず、大混乱の中国に独立をもたらした、またソ連の圧力に屈することなく国家建設を推進したことは高く評価されるべきである。

一方、鄧小平は理想主義を脱却して現実主義に立脚する必要性を強く認識した指導者だった。毛沢東が社会主義という理念に強く立脚して政策を推進したのに比べて、鄧小平は国民の福祉と安全を実現するという2つの目標を現実的に解決しようとした。また毛沢東が社会と個人は国家に従属すべきだとする国家主義的な政治理念を持っていたのに比べて、鄧小平は国家と社会は協力し合うべきであるとするコーポラティズム的な政治理念をもっていた。

鄧小平による改革開放は3つの権力の再分配プロセスとして説明できる。国家と個人の間の権力の再分配、政府と企業との間の権力の再分配、中央と地方の間の権力の再分配のプロセスである。改革によって個人、企業、地方が自立性を高めて社会的な活力を持つ存在として活動できるようになった。また開放を通じて、外部世界から技術、資金、管理方法を導入し、短期間で中国を国際市場に組み込んでいった。こうした改革開放を40年にわたって推進し今日の中国が存在するのである。

今後の中国にとって課題となるのは、強力な政府、公正な統治、政府による監督の3要素のバランスをとって、効率的かつ良好な政治秩序を作っていくことである。そのためにはさらなる法制化を進めていかなければならない。また、世界強国への仲間入りを目指すためには、経済力、軍事力、高水準福祉の実現、普遍的価値の体现の4要素の実現が必要である。経済の総合力、軍事力を高めた中国では、高水準の福祉の実現が喫緊の課題となっている。

（文責：星野 昌裕）